

# Not-God

## 『アルコールリクス・アノニマスの歴史』

Ernest Kurtz (アーネスト・カーツ)

### 第一章 はじまり

1934年11月-1935年6月

Presented by  
なかやま ひいらぎ

1

## はじめに

Not-God 32-33

**Not-God** — AAの書籍のなかには登場しないが、AAの書籍のなかだけでなく、AA共同体やプログラムの核心に存在する

### 1. あなたは神ではない (You are not God)

- First of all, we had to quit playing God — 「まず、私たちは自分が神のように振る舞うことをやめなくてはならなかった」 BB, p.90
- 無限でもなく、絶対でもなく、神でもない  
→ 神のような力を、とくに**コントロール**を求めている
- アルコールリクスは自分自身さえもコントロールできていない  
→ 他者には明確なのに、アルコールリクスはそのことを否定する
- 歴史的には、**絶対的コントロールは神だけができること**  
→ アルコールリクスは神ではない

2

# はじめに

Not-God 34-35

## 2. 神ならざる者 (not-God) たちの共同体

- アルコホーリックは神ではないから、個人として**限界 (limit)**を持つ  
この限界 (=不完全性) を受け入れることで、**癒しと全体性の回復**が始まる
- 他のアルコホーリックとの**つながり (connection)** を肯定する  
限界を受け入れることで、つながりの必要性に気づく  
→ 限界を肯定する AAそのものも限界ある存在

## 3. 肯定が否定に根ざしている

- 自分を (限界ある) 人間だと受け入れる → 全人的 (wholeness) な癒しを見いだす
- 「神ではない」ことの意味を現実に実現し、他者とのつながりによって生き延びる  
→ アルコホーリクス・アノニマスのストーリー

3

# エビーとビルのお話

Not-God 37

- 酒に狂っていた彼が、今度は宗教狂いになっているのか！
- **AAの思想の誕生の場面**  
—— このキッチンで種がまかれた
- ***"one alcoholic had been talking to another."***  
**一人のアルコホーリックがもう一人のアルコホーリックに話をした**
- 思想は、当然ながら、無から生まれることはない  
その起源と道程をたどる

1934年11月終わり — AA 12-19, AACA 85-88, PIO 111-116

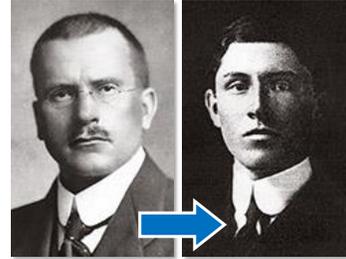
4



## 1 ユングとローランドの会話

Not-God 39

- ローランド・ハザードが事実上あらゆる治療を受けた後に、最終的にチューリヒの**カール・ユング**の治療を一年間受けた
- ローランドは再発してユングの所に戻り、この時の二人の会話が**AAの起源**となった



Rowland Hazard III, 1881-1945

「どのような医学的・精神医学的治療をしても、ローランドは**絶望的**で助からない」

「**霊的**または**宗教的経験**、ようするに本当の**回心**の経験が、まれにアルコールを回復に導く」

1931年のあるころ — AA 39-42, AACA 96,102,397, PIO 113-114,381-386

5

## オックスフォード・グループへ

Not-God 40

- ローランドは、**回心体験** (conversion experience) によって、しばらくのあいだ、強迫的な飲酒から解放された
- **オックスフォードグループ** oxford group
  - 特定の宗派に属さず、福音主義的、1908年に「原始キリスト教共同体」として創始
  - 「自己吟味、告白、償い、そして他者への奉仕に自分を捧げる」  
→ AAのステップ3~12
  - アルコホリズムはオックスフォード・グループの主要な関心事ではなかった
- ローランドは、アルコールに対して回心体験による生き方を宣べ伝えた

時期不明 (1930年代始めのどこか) — AA 41-42, PIO 114-115

6

# エビーの回復

Not-God 40

- エビーが飲酒のために収監されそうに  
→ ローランドが仮釈放の保証人となり、  
エビーをオックスフォード・グループへ
- 唯一の希望が回心の体験と宗教の働き
- 「それまで一度も知らなかった類の友好関係」
- エビーも回心体験を得て、彼が知るもっとも絶望的で自己破壊的な酒飲みの旧友ビル・ウィルソンにメッセージを伝えよう  
と考えた



Edwin T. Thacher, 1896-1966

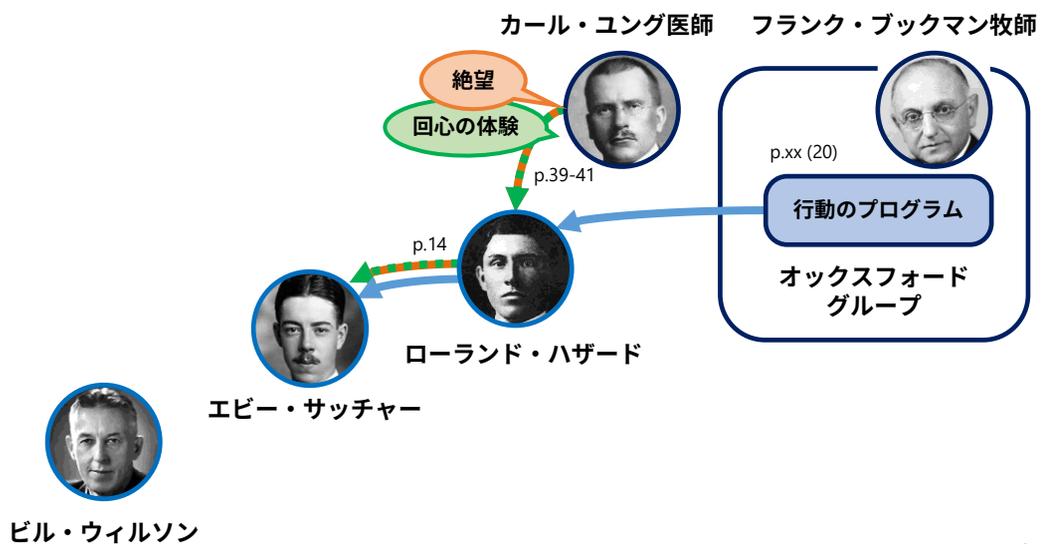
1934年秋 — AA 14, PIO 115

7

問題

解決

回復のプラン



8

## ビル・ウィルソンの幼少期

Not-God 41

William Griffith Wilson, 1895-1971

- 1895年バーモント州ドーセットに生れる
- 1905年 両親離婚 父が出ていった  
「父に見捨てられた」

- 「もし私の両親が私をもっと愛していたなら、別れることはなかっただろう。それは私がもっと愛らしければ、離婚は決して起こらなかったことを意味している。いつも結論はそうだった。それは私の落ち度だったに違いない。私が悪かったのだ」



ビルとドロシー

- 母親は知的な女性で**ボストンに移り**、医師を目指した → **喪失**
  - 「自分も妹のドロシーも、母とよい関係になれたことは一度もなかった」

1895-1905年 — PIO ch.1

9

## ナンバーワンの男を目指して

Not-God 42

- 見捨てられ感 → 断固たる意志力
- (母方の) **祖父**との関係
- 「世界中でオーストラリア人だけがブーメランをつくれるのはなぜか」 → 6か月かけて自分で木を削り、完成させた
  - 「お前はナンバーワンの男 (number-one man) だ」
- **成功**とは、**認められ**、**ナンバーワンの男**と呼ばれることだ
  - このブーメランが彼のアルコールリズムの物語でもあり、またAA誕生の源泉でもあった

1905年頃 — AACA 78-79, PIO 29-31

10

## 初めての親友

Not-God 43

- ビルに親友は少なかった
- **マーク・ワーロン** (Mark Whalon, 1886-1956)  
10歳年上の大学生 (後に郵便配達員)
  - シェークスピア、バーンズ、**インガーソル**、マルクス、ダーウィン、サムナー



- 近隣の街からの帰り道、彼らは居酒屋に立ち寄った
  - 友好的な社交、帰属感 → より深いところでは「**強迫観念と強迫的欲求** (obsession-compulsion)」 (※ compulsion は craving と同じ)
  - 「**それ以外のことを考えない**」「**それを再び追い求める**」

1908年 — PIO 22,49

11

## 初恋と喪失

Not-God 44

- **バーサ・バンフォード** (Bertha Banford)  
同級生、米国聖公会の牧師の娘 と恋仲に
  - 「生れて初めて、人に愛されるということを知った」

helplessness

- **バーサの突然の死** → **喪失と無力感**
  - 「自分の欲求も自分の愛情も、自分の必要、自分の飢えも望みも、いま目の当たりにしている創造主の恐ろしい御業の前では、何ものでもない」
  - この無力感は、その後の**ロイス**との出会いと結婚、第一次世界大戦への従軍と栄誉、1920年代のウォール街での成功を経ても消えなかった。**唯一の例外**を除いては。

Bertha Banford, 1894-1912

1912年 — AACA 79-80, PIO 35-36

12

## 初めての飲酒

Not-God 46

- マサチューセッツ州フォート・ロッドマン
  - 新任将校として、町の富裕層の社交に招かれた
  - 差し出されたブロンクスカクテルを飲んだ

「人の集まりに彼が参加したのではなく、ほかの人たちが彼を中心に集まっているのだ。信じられなかった。一瞬にして世界が変わったのだ。・・・自分よりすごい人などいない。みんなが友人だ。彼らも彼が好きだし、彼も彼らが好きだ」

- その瞬間から、ウィルソンはとらえどころのない、突き詰めれば幻想にすぎない、この**自由の感覚**を取り戻すことに生涯を費やした。

1917年夏 — AA 1, AACA 80, PIO 55-57

13

## ウォール街とタウンズ病院

Not-God 47

- ウォール街での**成功**と1929年の大暴落での**破産**
- 1930年から1934年まで文字通り「**アルコールの地獄**」に陥っていた
- 二人の医者からの支援：
  - レナード・ストロング医師（妹ドロシーの夫）
  - クラーク・バーナム医師（義父）
- 1934年**チャールズ・B・タウンズ病院**への入院
- **ウィリアム・シルクワース**医師との出会い

1925年～1934年 — AA 3-10, AACA 81-83, PIO 77-101

14

## シルクワース医師の説明

Not-God 48

- アルコホリズムは**病気** (illness) である
- アルコールに対する**身体的なアレルギー**  
→ 飲酒のコントロール喪失 (**強迫的欲求**)
- アルコールに対する**精神的な囚われ**  
(**強迫観念** obsession) → 再飲酒
- わずかな希望として、患者の努力の分かちあいを強調した
  - 身体的なアレルギーとそれによって生じる強迫的欲求 (compulsion) は受け入れなければならないが、強迫観念がありながらも飲まずにいられるように力を合わせる  
ことができるのではないか



William D. Silkworth, 1873-1951

1933年晩秋 — AA xxiii-xxxviii, 11, AACA 10, PIO 102

15

## 絶望の宣告 hopelessness

Not-God 49

- ロイスが働いて、夫を経済的に支えていた
- 必然的な再入院
  - シルクワース博士の宣告  
「**ビルを閉じ込めておくか、あるいは狂気が死に至るに任せるか**」
- 休戦記念日 (11月11日) に再飲酒
  - ビル・ウィルソンの最後の暴飲
- 自分は**絶望的**である (後にステップ1として語られる)

1934年9月 — AA 11-12, AACA 76-77, 83-85, PIO 108-111

16



## 2 エビーの登場

Not-God 50

- 「何てことだ。エビーと**宗教**なんて！」
- **祖父ファイエット**は**インガーソル**に傾倒した**超絶主義者**だった
  - **超絶主義**（超越主義）：ロマン主義の影響  
感受性・主観を重視（⇔理性・合理主義）  
人間に内在する善・直観への信頼
  - Robert G. **Ingersoll** (1833-1899) - the Great Agnostic（偉大なる不可知論者）
  - 祖父の影響で12才頃に教会を離れた
- AAに深く浸透している「**宗教**」への**自覚的な慎重さの由来**



1934年11月終わり — AA 13,15, AACA 85-88, PIO 111-116

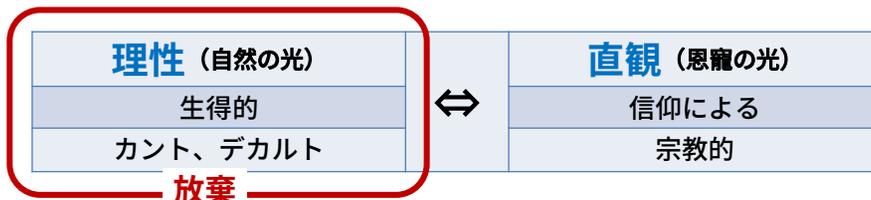
17

## エビーの再訪(シェップ・Cとともに)

Not-God 51-52

- ビル自身が最も誇りとしていた、**理性的な精神**（人間を動物より上に位置づけるもの）の**放棄**を求めた——それは**幻想**だから

二人が彼に求めたのは、彼にとっては**弱さ**を表わしていた。どうしたら人は、自分が信仰すべき唯一のものである持つて生れた**理性を放棄**するほどに、自分を貶めることができるのだろうか？



surrender, give up

1934年11月の終わりが12月の始め

18



### 3 ビルの靈的体験

Not-God 54

急に部屋が白い光で満たされた。言い表せないエクスタシーに達した。心の目では、私が山頂にいて、そこには空気ではなく靈の風が吹いているようだった。そして、私は自由な人間だと悟った。ゆっくりとエクスタシーは静まった。ベッドに横になっていたが、いまや別世界、新しい意識の世界にいた。私と私をめぐるすべてに素晴らしい実在感があった。「これが説教者たちの言っていた神なのだ！」と思った。「大いなる平和が私をとらえた。どれほど事態が悪いように思えても、すべてはよいのだ。神と神の世界では、すべてが素晴らしいのだ」と私は考えた。

- **神が私のためにいてくれる**——その後ビルは神の実在を疑ったことはなかった

1934年12月14日 — AA 21, AACA 94-95, PIO 116-120

19



### 3 『宗教的経験の諸相』

Not-God 56

- **ウィリアム・ジェームズ『宗教的経験の諸相』**
  - 宗教的経験は**客観的な現実一人を変容**させる
  - **徹底的な絶望** (痛み、苦しみ、不幸) complete hopelessness
  - **深いところでの収縮** *deflation at depth*
- AAの核となる考え
  - 半分：**靈的回心の必要性** (ユング→ローランド・・・)
  - 半分：**収縮と希望**とをいっしょに伝えること (オックスフォード・グループの実践、「一人のアルコール依存症者がもう一人に話す」こと)
  - 二つの「半分」はウィルソンの心のなかで結合し・・・一つになった

1934年12月15日 — AACA 95-96, PIO 124-125

20

# AAの元になったアイデア

Not-God58

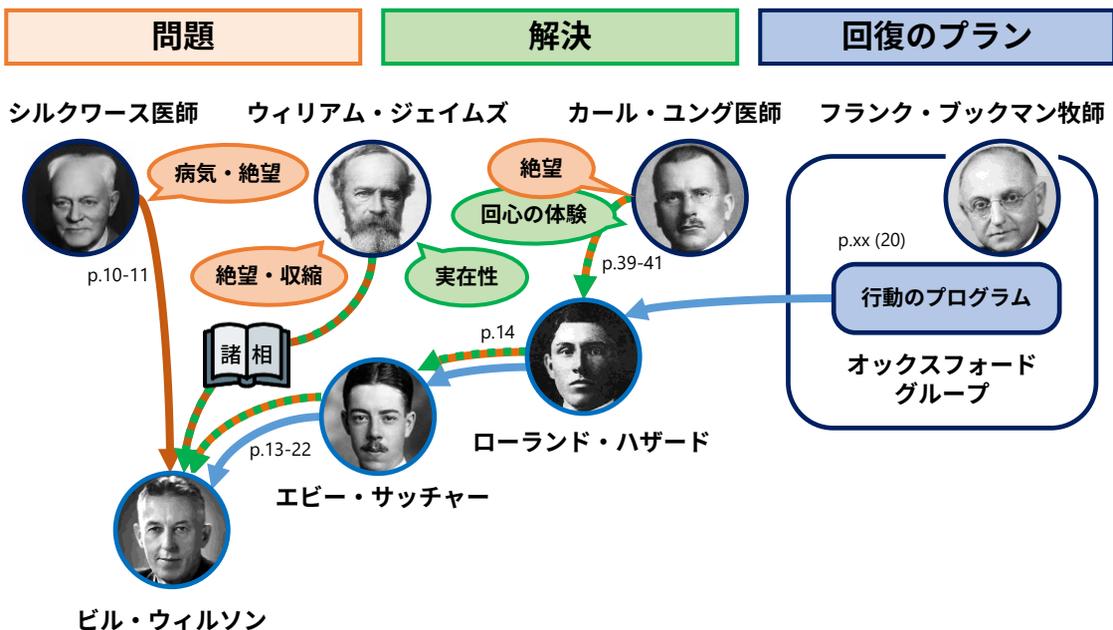
深いところでの収縮 (deflation at depth) 、そう、そうだった。それがちょうど私に起こったのだった。カール・ユング博士は、オックスフォードグループのエビーの友人に対して、彼のアルコールリズムが**絶望的**であると告げたが、シルクワース博士も私に同じ宣告をした。それから、同じアルコールリクであるエビーが私にまったく同一のものを手渡した。シルクワース博士の言うことだけでは、私は意見を完全に受け入れなかったが、エビーが来て、**一人のアルコールリクがもう一人のアルコールリクと話し始めたとき**に、私は確信をした。

アルコールリクたちのなかで一人がメッセージを運び、この原理を次に伝えていくという一連の行動を、私は思い描いた。私がいままでに何よりも望んでいたものは、ほかのアルコールリクへの働きかけだとわかったのである。

- ウィルソンが望むかどうかにかかわらず、ソブラエティを維持するためにほかのアルコールリクが**必要だ**、という認識

1934年12月18日の退院の前 — AA 22, AACA 96, PIO 125-126

21



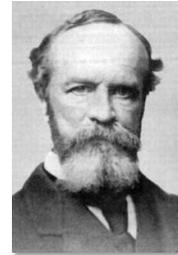
22

# ウィリアム・ジェームズ

William James, 1842-1910

Not-God 60

- **ジェームズ**がウィルソンやAAに**与えた影響は複雑**
  - ビッグブックに引用された、ただ一人の著者 引用は**宗教的経験**より**諸相** (varieties=多様性) に関連している
- 信仰にいたる道は一つだ、とは思ってほしくない (AA 42)
- 「深いところでの収縮 (deflation at depth)」はおろか、**収縮** (deflation) すら、『諸相』のどこにも出てこない
- 宗教への開放性 (openness) への言及がない
  - 酒狂いの唯一の治癒は**宗教狂い**になることだ
  - **回心** (conversion) という重要なキーワード



23

# プラグマティズムと多元主義

Not-God 61

- ウィルソン自身の言葉どおり、**ジェームズはAAの創始者**
    - ウィルソンは・・・**絶望的状态の必要性と役割**に、ジェームズの「**回心**」の描写を結びつけた
  - **プラグマティズム** (実用主義・役立つものを真とする哲学上の立場)
    - AAの思想の「市場価値」のために、プラグマティストであるジェームズをプラグマティックに活用した
  - **多元主義** (pluralism・唯一の究極的原理に還元しない立場)
    - 「**絶対的**」に考えるのがアルコールク ⇔ 違いに寛容な多元主義
- ← 相対主義とは異なる——究極的原理の存在は否定しない

24

## オックスフォード・グループに

Not-God62

- アルコホーリクへの関心は薄かった
  - ビルは**アルコホーリクに関心**を向けた

感覚的にわかってきたことがあった。「酒」への強迫観念と闘っているアルコホーリクは、同じ闘いに身を投じているほかの人たちと話す時間をもつとうまくいくようだった。当然、彼らは酒について話をしていたのではなかった。

オックスフォードグループの原理について話していた

- ビル以外は全員酔っ払ってしまった
- **ロイスの勧め** — うまくいっていないというビルの悩みに、**シルクワース博士に相談**するよう助言した

1934年12月 — AACA 96-97, PIO 127-132

25

## シルクワース医師の助言

Not-God64

- ビルは**照明体験**の話ばかりしていた
- 「君は**馬の前に馬車**を置いている」
- まず彼らを打ちのめ (**deflate**) さなくてはならない — (**絶望・収縮**)

彼らに医学的な事実を伝えるんだ。**強迫観念**が彼らに（最初の一杯を）飲むように強要し、身体の**過敏性**つまり**アレルギー**が彼らに死ぬか気が狂うまで飲み続けることを強要する。これを一人の**アルコホーリク**がもう一人の**アルコホーリク**に話すことで、奥深いところにあるエゴにひびが入る。オックスフォード・グループから手に入れた原理を試せるのはそれからだ。

1935年4月 — AACA 97-98, 101-102

26

## 仕事でアクロンへ

Not-God65

- アルコホーリクへの「伝道活動」に熱を上げていることに、オックスフォードグループの人たちばかりでなく、夫婦の友人からも**批判**があった
- ウォール街に戻り、オハイオ州**アクロン**での**代理権争い** (proxy fight) に加わった
- 代理権争いは敗北に終わった —— **アクロン**に取り残された



アクロンは五大湖の南にある

1935年4月 — AA 223-224, AACA 97-98, PIO 133-135

27

## メイフラワーホテルのロビーにて

Not-God65

- バーから聞こえてくる談笑は、ビルの自己憐憫を刺激した
- 「私にはもう一人のアルコホーリクが**必要なんだ**」
- 長老派の牧師**ウォルター・タンクス**
  - ノーマン・シェパード → **ヘンリエッタ・セイバーリング**夫人
- 「私はオックスフォードグループから来ました。私はニューヨークからやってきた酒狂いです」

1935年5月11日 — AA 224-225, AACA 98-99, PIO 135-137

28

## ヘンリエッタ・セイバーリング

Not-God66

- ヴァッサー大学卒（名門女子大）  
グッドイヤー社の創業者で元社長の息子の妻
- オックスフォードグループの信奉者
- ドクター・ボブの酒をやめさせることに2年間
- セイバーリング家の敷地にある彼女の家
- 「彼と話していただけますか？」とヘンリエッタは依頼した
- 翌日（5月12日）の午後会うことになった



Henrietta Seiberling, 1888-1979

— AACA 99-101, PIO 137-138

29

## 4 母の日

Not-God68

- ビルはシルクワース医師の助言を思い出した  
「まず彼らを打ちのめす（deflate）べきだ」
- ビルはボブに飲酒の経験について話した
- シルクワース医師の強迫観念、強迫的欲求（渴望）、アレルギーの話は特に熱心に話した
- それからエビーの訪問と、彼の簡潔なメッセージ
- ビルは質問も説教もしなかった。「あなたは何をすべきだ」とも、「いっしょにやろう」とも言わなかった



セイバーリング荘の  
ゲートハウス

1935年5月12日 — AA 225-226, AACA 101-103, PIO 143

30

## ロバート・ホルブルック・スミス

Not-God69

- バーモント州のセントジョンズベリー
- ダートマス大学、飲酒に励んだ  
卒業後三年仕事し、**ミシガン大学医学部**
- 朝の手の震え、酒を抜くために退学、**ラッシュ医科  
大学**へ インターンの間は飲まなかった
- 数十回療養所に入ったが酒の問題は解決しなかった
  - **1932年末**、共通の知人が**ヘンリエッタ・サイバーリング**にボブの酒の問題を伝え、ヘンリエッタは彼を**オックスフォード・グループ**へ招いた



Robert H. Smith, 1879-1950

— AA 241-250, AACA 103-104

31



## 4 他の人に働きかけること

Not-God70

- ともにオックスフォード・グループに加わっていたが、**二人には違いもあった**

「私は善良な人たちが私に勧めてくれることはすべてやった。みなさんの言うとおりにしたんだ。とても誠実に正直にやったと思うよ。でも自分はまだ酒をやめられなかった。けれど、たった一つ彼らが言わなくて、ビルが教えてくれたことがあった。それは**誰かの役に立とうとしてごらん**、ということだ」



- 「**霊的なアプローチは、スポンジのように吸い上げて自分が抱え込んだままでは、役に立たないのだ**」

— AACA 105

32



## 4 ドクター・ボブの最後の酒

Not-God73

- アトラシティックシティで開かれる医師会の総会へ
- 数日後、ボブの職場の看護師から、その日の朝4時にボブを駅から引き取った
- アンとビルはボブを連れ戻し、酒を抜いた
- 手術の日の朝、ボブ「**ビル、私はやり抜くよ**」
- 「いや、**私たちが話しあっていたことについてだ**」
- ボブは手術の後、債権者たちや傷つけた人たちを訪問し、自分の病気について告白し、実際的な償いの約束をした



1935年6月初旬 — AA 226-227, AACA 105-107

33

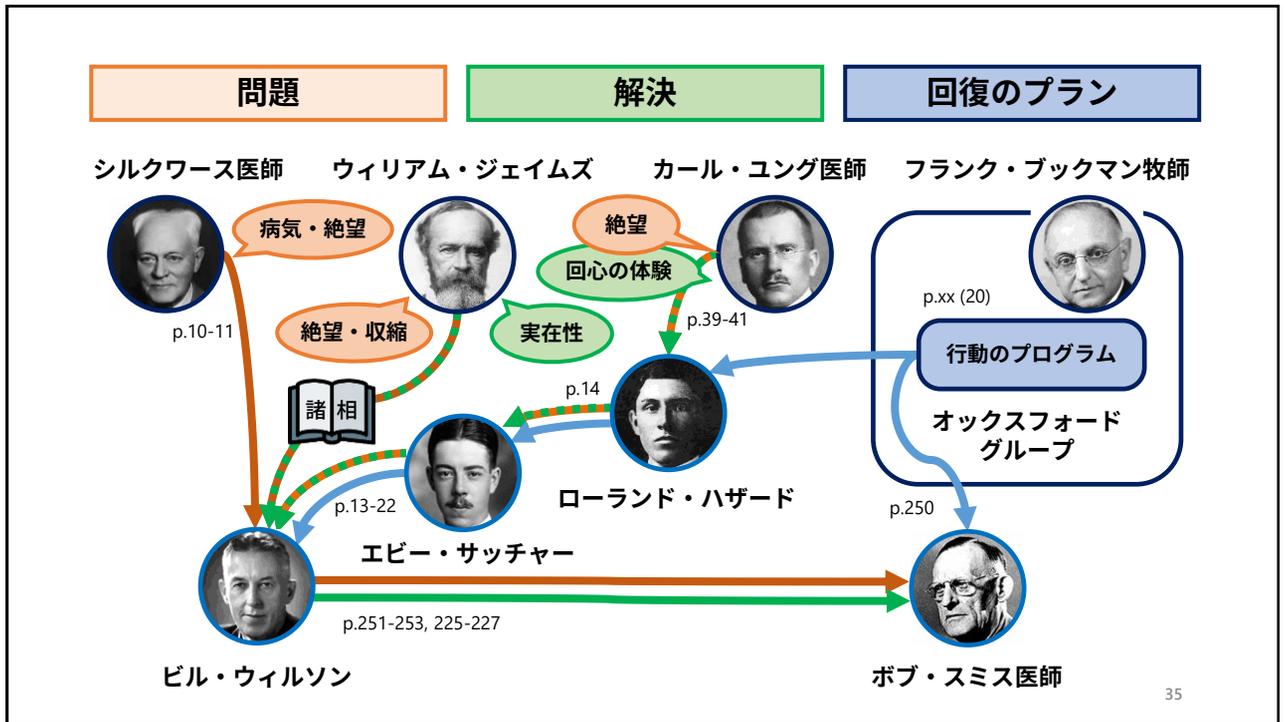


## AAの四つの「創始の瞬間」

Not-God74

1931年	カール・ユング博士とローランド・ハザードの会話
1934年11月末	エビー・サッチャーのビル・ウィルソン訪問
1934年12月中旬	タウンズ病院でのウィルソンの「 <b>霊的体験</b> 」 ウィリアム・ジェームズの（著書の）発見
1935年5月～6月	ウィルソンと <b>ロバート・スミス医師</b> の交流

34



## AAプログラムの中心思想 (1)

Not-God75

プログラムのルーツが二つある —— 医学 と 宗教

### 1. 絶望 hopelessness

- ユング医師：**宗教体験**（あるいは霊的体験）と**回心**（conversion）
- ジェイムズ：霊的体験と回心の**必要性**、その道筋と根源は**多様**である

なぜ回心が必要なのか

- ユング医師：アルコールリズムは医学的には**絶望**である
- シルクワース医師：**身体的アレルギー**・**精神的強迫**

ウィルソンはこの絶望を**病気**という言葉で表現した

36

## AAプログラムの中心思想(2)

Not-God75

### 2. 収縮 *deflation*

- 絶望から生じた（自我の）**収縮** → **底突き** (*hit bottom*)

### 3. 回心 *conversion*

- この言葉は採用されなかったが、底はより高い何かがあることを暗示
- 飲酒 → 断酒 人生のスタイル全体の転換

### 4. 転換 *conversion*（他者の必要性）

- まったくの自己中心性という破壊的な状態  
→ 建設的、創造的、他者との**全人的な交流** *fully human interaction*

37

## 病気ではなく、病人の理解

Not-God76

- アルコホーリックの持つ中心思想 = **自己中心性** *BB, p.90*
- **自己という窮屈な牢獄**を脱出する必要  
人類の偉大な宗教すべてが基礎をおき、表現するテーマの一つ
- 人生には、他者 (*others*)、ほかの一人 (*an Other*) のために生きるという究極の意味がある
- 自己超越への探究（ユングとジェームズの思想）——エビーによって実践された——ビルはボブに絶望を語った
- 自分の限界を受け入れるからこそ、人に差し出せるものがある

38

ご静聴、ありがとうございました。

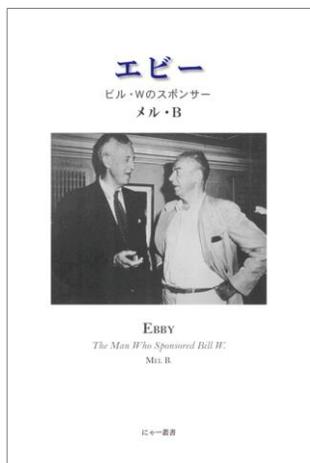


MAY-05-2023

from *Back to Basics – AA Beginners Meeting*

39

## にや一叢書のご案内



『エビー：ビル・Wのスポンサー』

メル・B 著

にや一叢書刊（オンデマンド出版）

A5判 168ページ

2,000円（税別・送料別）



<https://www.seichoku.com/item/DS2001345>

40